

入選

小さな親切

山口県 日置中学校

1年 木村有咲美

私が小学4、5年生のときです。徒歩で下校していたら、たくさんのごみが落ちていることに気がつきました。そのとき、ポイ捨てやごみ拾いについて勉強をしていたのもあって、私は気がついたら、手にいっぱいにごみを持って歩き出していました。

そうすると、地域の人とすれ違い、私がたくさんのごみを持って帰っているのを見られていました。次の日、校長先生に呼び出されたので、昨日のことで怒られると思ったら、「下校中にごみ拾いしたの？」と聞かされただけでした。

しばらくしたら、「小さな親切」で表彰されました。その後、たくさんの人から感謝されたり、褒めてもらったりしました。そのときは、感謝されたくて拾ったわけではないけれど、やっぱり、「すごいね。」「ありがとう。」と言われると嬉しかったし、いい気分になりました。

また、今度は私が親切を受ける立場になりました。6年生の下校中のときでした。私は荷物が多くて、歩くのに苦労していました。そのとき小学2、3年生ぐらいの子が、荷物を運ぶのを手伝ってくれました。私の方が年上なのに、声をかけてくれ、しかも荷物を持ってくれたことがとても嬉しかったのを覚えています。私もその子のように、困っている人がいたら自分から進んで声をかけたいと思ったできごとでした。

このように、親切をしたり、されたりしていても、私には今も、心の奥に自分ができなかったことを後悔しているできごとがあります。

私が中学生になったころ、自転車で登校していたときのことで。遠くで白杖をついた視覚障がいのある男性が歩いていました。その男性は方向を見失ったのか、車道寄りに歩いているように見えました。「危ない」と思ったときに、近くの家から女性が出て来て、男性をサポートしていました。

たまたま女性が声を掛けて、車道を避けることができましたが、誰も出てこなかったら、私は声をかけることができたかどうかわかりません。実際私は目の前で、困っている人がいてもすぐに助けられず、結局声を掛けることもできなかったのです。だから、その女性の行動力に動揺していました。助けてくれてよかったと思うと同時に、見ているだけで何もできなかった私は、今もこのことを悔やんでいます。

ごみ拾いをした私。小学生の後輩に声を掛けて助けてもらった私。自分がした親切、相手にしてもらった親切を知りながら、視覚障がいのある人に声を掛けられなかった私は、勇気を出して行動に移せませんでした。私のごみ拾いをできたのは、自分と物の関係だったからです。声を掛ける必要もなく、きれいにしようと思う気持ちだけでできたからです。

人と人が助け合うことは、簡単なようで難しいと思います。ですが、次もし困っている人がいたら、あの女性や私を手伝ってくれた小学生のように、まずは声掛けからしようと思います。